

万葉の川心

横浜市立羽沢小学校教諭 澤井 園子

反歌二首のうちの一首

(巻第六 九二五番歌)

ぬばたまの 夜の更けぬれば 久木生ふる
清き川原に 千鳥しば鳴く

この歌の前にある反歌は、朝の山景色を詠んでいる。「み吉野の象山のあたりの梢には、たいそう多くさえずり合う鳥の声が響くよ。」次に位置するこの歌は、真夜中の川景色だ。「ぬばたまの夜がふけ果ると、久木の生える清らかな川原に、千鳥がしきりに鳴くことだ。」万葉集で千鳥は、清い川原で鳴く。夜に鳴き、逢いたくて恋しくて鳴くという。山と川、朝と真夜中。表裏一体という言葉もあるように、切り離せない二つのものがある。それらは対比させることで、より鮮明にそれぞれの世界を際立たせる。光と影、天と地、互いがあるからこそ「そのもの」でいられる。

碑は、山梨県山梨市駅そばの万力公園内にある。万葉集に詠われた多くの植物が育ち、説明書きや万葉集の歌を彫った石が点在する。まさに万葉の森だ。「清き川原の石碑」を探して森に入る。はじまりはオリエンテーリングのようで胸が躍った。万葉集の偉大な研究者である犬養孝先生書の碑があった。横のボタンを押すと、肉声が聞ける仕組みになっている。しみじみと聴いた。公園内を歩き、歌を見つけると立ち止まって声に出して読む。また歩く。すると、雁行堤が現れた。甲州流防河法として敵を迎え撃つために川に幾重にも作られた石堤だ。武田信玄はこの地に防水林として松を植えたとい



雁行堤

えられている。堤は今もそのままの姿で大切に残されている。また歩き、歌を読む。小川の緑のせせらぎの音に体ごと包まれていく。

花びらの重なりに妻を思う心、花の美しさに恋人を慕う心を見る。一方で、いとしい人を失った悲しみがあり、散る花びらに止まらない涙がある。またひとつ、またひとつ。森の中で万葉の世界にとっぷりと浸り、いつしか涙があふれた。そうして心は、先日逝ってしまった同い歳の友のことではたばいになった。突然すぎた。なぜもういないのか。まだ遣り残したことはたくさんあるはずなのに。あなたがいたから、輝けたのだ。あなたがいたから私でいられたのだ。悲しみは森に広がり、時が止まった。そうしてどのくらい経ったのだろうか・・・碑があった。小さく丸い岩に、もう薄くなっていたけれど、美しい文字がしっかりと刻まれていた。

あの日「まあ、のんびりやってください。」と、笑顔で街に消えていったのが最後の言葉になった。森を出て笛吹川の河原を歩きながら、「スタンド・バイ・ミー」を口ずさんだ。山は遠く青く輝き、川風は涙を乾かした。あなたは、関わった全ての人の中で輝き続け、励まし続けるだろう。そうして生きた証は、人のつながりの中でずっと受け継がれていくだろう。時を越えて。